

大会概要

- ◆期 間 2008年3月17日(月)～18日(火)
- ◆会 場 中京大学名古屋キャンパス(〒466-0825 名古屋市昭和区八事本町101-2)
センタービル(0号館)2階・7階・8階、4号館3階431教室
詳細は2頁目の案内マップを参照
- ◆交 通 名古屋市営地下鉄「八事」駅下車(5番を出口上がると目の前がセンタービル)

◆スケジュール

	3月17日(月)	3月18日(火)
午前	10:00-12:00 学会理事会 12:00 受付開始	09:00-11:00 一般発表Ⅱ 11:10-13:10 国際交流委員会企画 シンポジウム
午後	13:00-15:00 実行委員会(開催校) シンポジウム 15:10-17:10 一般発表Ⅰ 17:20-18:20 学会総会 18:30-20:30 懇親会	13:15-13:55 学会会員 ランチミーティング 14:00-16:00 一般発表Ⅲ 16:10-17:50 研究委員会企画 シンポジウム

(学内の食堂営業時間：両日とも11:00-14:00)

◆大会実行委員会組織

- 委員長 西山哲郎(中京大学)
- 委員 來田享子(中京大学)
高橋義雄(名古屋大学)
藤田紀昭(日本福祉大学)
新井野洋一(愛知大学)
- 協力 加藤晴明(中京大学)
斉藤尚文(中京大学)
- 補助 中京大学大学院体育学研究科学生
駒沢大学大学院人文科学研究科学生

◆大会実行委員会事務局

中京大学現代社会学部
〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立101
Phone/FAX : 0565-46-6517 e-mail : nisiyama@sass.chukyo-u.ac.jp

日程

3月17日(月)

◆学会理事会 10:00～12:00 <センタービル7階 07D 教室>

◆受付開始 12:00～

◆実行委員会(開催校)企画 13:00～15:00 <4号館3階 431 教室>

シンポジウム「変わりゆく日本プロ野球」

登壇者：二宮清純(スポーツジャーナリスト、スポーツコミュニケーションズ代表)

吉田国夫(千葉ロッテマリーンズ事業本部 営業部 営業担当リーダー)

柴田哲志(日本テレビ放送網 スポーツ局 スポーツ企画推進部長)

コメント：清水 諭(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

司 会：西山哲郎(中京大学現代社会学部)

問題提起

今次大会の実行委員会は「変わりゆく日本プロ野球」と題して、2004年秋の球団数削減・1リーグ化騒動以降、劇的に変化を遂げつつある日本のプロ野球の将来についてシンポジウムに取り上げることにしました。

ここ数年、プロ野球のテレビ中継は地上波視聴率の低下が著しく、日本のプロ野球を支えてきたビジネスモデルは危機的な状況にあります。その一方で、札幌や仙台では球団の移転や新設があり、四国や北信越地方では独立プロリーグが創設され、千葉ロッテマリーンズを筆頭に既存球団でもJリーグの球団経営に範をとった地域密着化戦略が展開されつつあります。こうした希望と失望の入り混じる日本プロ野球の現状と将来を考えることは、単に一業界の浮沈の問題ではなく、プロ野球選手の活躍に一喜一憂してきた日本の老若男女の生活問題でもあって、それゆえ本会で議論するのにふさわしいテーマだと考えました。

報告要旨

まず、プロ野球のみならず日本のスポーツ界全体を熟知される二宮清純氏には、プロ野球のおかれた現状を概括していただいた上で、東北楽天ゴールデンイーグルスや四国・九州アイランドリーグなどを中心にプロ野球球団の新しい経営戦略についてお話を伺います。次に、千葉ロッテマリーンズ事業本部の吉田国夫氏から、単にスタジアムの経営だけでなく周辺地域の街づくりにまで影響を与えてきたマリーンズの経営戦略についてご説明いただきます。そして、日本テレビ放送網スポーツ企画推進部長の柴田哲志氏には、メディアコンテンツとしてのプロ野球について、現状の問題点と今後の可能性

について示唆をいただきたいと思います。

その上で、お三方のご報告をベースにして、筑波大学の清水諭氏にプロ野球と現代社会の関わりについてまとめの言葉をいただき、本シンポジウムから得られた知見を総括していただく予定です。

◆一般発表Ⅰ 15:10～17:10

<会場 α・704 教室>

1. メガイベント (Mega-event) 座長：高橋豪仁 (奈良教育大学)

山ノ口寿幸 (台湾師範大学)

Reconsideration on the Torch Relay of the Beijing 2008 Olympic Games

内海和雄 (一橋大学大学院)

オリンピックの批判・否定論の検討

黄 順姫 (筑波大学大学院)

W杯サッカー大会の異なる集合的記憶 -日本、韓国、在日コリアンの比較を通して-

黒田 勇 (関西大学)

メディアスポーツとしての「世界陸上・大阪」

<会場 B・0802 教室>

2. グローバリゼーション (Globalization) 座長：山下高行 (立命館大学)

加藤朋之 (山梨大学)

蹴球の伝習 -トランスミッションとしての鉄道-

乗松 優 (九州大学大学院)

プロボクシングの政治学 -戦後日本外交における岸のアジア政策と東洋チャンピオン・カーニバルの展開-

西尾 建 (ラフバラ大学大学院)

グローバリゼーションと労働移動 -日本ラグビーとトンガ、フィジー、サモア-

伊藤央二 (順天堂大学大学院)

グローバル化時代における社会同化とスポーツ参与

<会場 C・0803 教室>

3. 観光・ツーリズム (Tourism) 座長：松村和則 (筑波大学)

王 姿琪 Wang, Tzu-Chi (台湾師範大学)

The educational meaning of the overseas Educational Trip

劉 于琳 Liu, Yu-Lin (台湾師範大学)

Study of Taiwanese female backpackers' motivation

楊 奕璋 Yang, I-Wei (台湾師範大学)

SWOT Analysis of Sport Tourism of Windsurfing in Penghu

圓田浩二 (沖縄大学)

ダイバーはなぜ潜るのか？

<会場 D・0804 教室>

4. 体育教育 (Physical Education) 座長：白石義郎 (久留米大学)

佐藤和行 (筑波大学大学院)

ラグビー強豪校における選手のつくられ方 —「規律中心型」と「自主性中心型」の比較を通して—

野村 徹 (東京学芸大学大学院)

「得」をする能力とハイパーメリトクラシー —「3年B組金八先生」にあらわれた新しい運動の出来る子像—

原 祐一 (東京学芸大学大学院)

「体育」という社会的行為の不思議さ —「スポーツ的行為」と「教育的行為」の2重性—

野村 圭 (東京学芸大学大学院)

「体育教師」のアイデンティティ・ポリティクス —学校秩序と逸脱者の形成過程—

<会場 E・0805 教室>

5. ライフコース／ライフヒストリー (Life Course/Life History) 座長：千葉直樹 (北翔大学)

小林浩平 (東京学芸大学大学院)

体育教師にとって career とはなにか

須田俊之（筑波大学大学院）

サッカーコーチの指導観における再帰的身体と美意識 —いかにしてサッカーコーチは成熟していくのか—

鈴木文明（市立名寄短期大学）

在日朝鮮人女性とスポーツの記憶 —一世のハルモニ達のライフストーリーから—

後藤貴浩（熊本大学）

スポーツライフの差異に関する研究 —ライフヒストリー分析を通して—

<会場 F・0806 教室>

6. ボランティア (Volunteer) 座長：藤田紀昭（日本福祉大学）

稲葉慎太郎（神戸大学大学院）

スポーツ・ボランティアの活動内容からみた期待と満足 —世界陸上 2007 大阪大会のケーススタディー—

山口泰雄（神戸大学大学院）

縦断的分析によるスポーツ・ボランティアの期待と満足 —世界陸上 2007 大阪のケーススタディー—

前田博子（鹿屋体育大学）

非営利地域スポーツクラブのボランティア・マネジメントにおけるリーダーシップ理論の有効性

葉 盈蘭 Yeh, Ying-Lan（台湾師範大学）

The Development of Taiwan Sport Volunteers

<会場 G・0807 教室>

7. 消費主義とマーケティング (Consumerism & Marketing) 座長：菊 幸一（筑波大学）

劉 漢賢 Liu, Han-Hsien（台湾師範大学）

The Influence of web game experience on the involvement of professional sports: A case study of NBA Fantasy.

江 建徳 Jiang, Jian-Guo（台湾師範大学）

A study of the effect of sport celebrities' achievement on the consumer's behavior of

their endorsed sneakers: take basketball sneakers for example

朱 文增 Zhu, Wen-Zeng (台湾師範大学)

A Study on the Consumer Behavior of the Japanese Tourists to IBAF Baseball Olympic Qualifying Tournament (Asian Baseball Championship 2007)

3月18日(火)

◆一般発表Ⅱ 9:00～11:00

<会場 A・0801 教室>

1. メディア (Media) 座長：飯田貴子 (帝塚山学院大学)

李 政勳 Lee, Cheng-Hsun (台湾師範大学)

The Globalization of Sports Media in Taiwan: Nowadays and After Sports Lottery is Released

橋本政晴 (信州大学)

メディアスポーツは「社会問題」なのか? —「生活空間」からメディアスポーツを問い直す—

清水泰生 ((社)日本マスターズ陸上競技連合)

世界陸上の実況中継 —ことばを中心に—

白石義郎 (久留米大学)

『スラムダンク』における成長の言語ゲーム

<会場 B・0802 教室>

2. 社会政策 (Social Policy) 座長：森川貞夫 (日本体育大学)

栗山靖弘 (横浜国立大学大学院)

「体育の日」に関する歴史社会的考察

金子史弥 (一橋大学大学院)

スポーツ政策ネットワークに関する研究 —UK の事例研究—

奥田睦子 (金沢大学)

ドイツにおける総合型地域スポーツクラブへの障害者の参加システムの検討

岡田千あき（大阪大学）

国際協力分野におけるコミュニティ・スポーツ論の可能性

<会場 C・0803 教室>

3. 台湾のバスケット（Basketball in Taiwan） 座長：高橋義雄（名古屋大学）

林子揚 Lin, Tzu-Yan（台湾師範大学）

The research on the development of amateur and professional basketball in Taiwan

陳駿安 Chen, Juan-An（台湾師範大学）

The research on the development of high-school basketball League in Taiwan

陳麗安 Chen, Li-An（台湾師範大学）

A Study of Super Basketball League Experiential Marketing Strategy

李姿萍 Li, Tzu-Ping（台湾師範大学）

Development of Women's Division A Basketball in Taiwan

<会場 D・0804 教室>

4. ジェンダー（Gender） 座長：熊安貴美江（大阪府立大学）

荒川和民（スポーツライター）

近代スポーツにおける「男らしさ」を揺さぶる ―榎本喜八の事例を通して―

鄭稼棋 Cheng, Chia-Chi（台湾師範大学）

A study of job stresses and coping strategies for female basketball coach in Taiwan

郭雅婷 Kuo, Ya-Ting（台湾師範大学）

The study of the participating motivation and the gender role conflict in the female athlete: Take “NTNU Volleyball Second grade group” for example

水野英莉（岐阜医療科学大学）

スポーツ達成における女性間の差異 ―日・米の女子サーフィン選手の経験から―

<会場 E・0805 教室>

5. 身体と環境（Body & Environment） 座長：西山哲郎（中京大学）

宮坂雄悟（東京学芸大学大学院）

遊びの伝達における身体の役割に関する研究

小谷寛二（福山平成大学）
共振する社会的身体 —その2—

村田周祐（筑波大学大学院）
スポーツの空間と生業の場の重複をめぐる「正統性」 —「環境調和型スポーツ」としての
スクーバ・ダイビング—

笹瀬雅史（山形大学）
登山の大衆化と山岳環境の保全

<会場 F・0806 教室>

6. レクリエーション&アミューズメント (Recreation & Amusement)

座長：Lee Thompson（早稲田大学）

張 育綺 Chang, Yu-Chi（台湾師範大学）

The fusion of Taiwanese folk pigeon game and local culture: Take Dingjou and Honchie village for
example

鄭 南雄 Jeng, Nan-Hsiung（台湾師範大学）

Case study: Show-wagon in Taiwan

范 欣宜 Fan, Xin-Yi（台湾師範大学）

Research on the Relationship between Recreational Attractiveness and Visitor Satisfaction and
Loyalty of the Taipei Zoo

◆国際交流委員会企画 11:00~13:10 <4号館3階431教室>

シンポジウム「アジアにおける伝統スポーツと社会変動」

今日、アジアの国々のスポーツは、グローバル化の波の中で大きく変容しよう
としています。衛星放送やインターネットによるメディアによって、欧米のスポーツ情報
がリアルタイムで手に入るようになり、われわれの生活の中に欧米のスポーツが急激に広
がっていきました。また、情報だけではなく、人も国境を越えて活動を始めようになり
ました。今では日韓のアスリートが世界で活躍したり、逆に欧米のアスリートが日韓で活
躍するということが珍しくなくなりました。このような社会変動の中で、とりわけ伝統ス
ポーツは、グローバル化によって大きな影響を受け、その存続をめぐる大きく揺らぎ
始めています。

そこで、今回の日韓研究交流シンポジウムは「アジアにおける伝統スポーツと社会変動」をテーマに、韓国と日本の伝統スポーツが社会変動によってどのように変容したのかを日韓両国から現状報告をしてもらい、これからの伝統スポーツのあり方について議論したいと考えています。

なお、本テーマは本年7月26日から29日に京都大学で行われる「第5回 ISSA 世界会議京都大会」のメインテーマ「Sport and Society at the Crossroads」を反映したものであり、そこで開かれるアジアセッションのテーマとも関連づけて継続的に追求していきたいと考えています。

<発表者>

1. Prospects and Social transformations of Taekwondo in Korea
Park, Jin Kyung (Kwandon University)
2. 日本における伝統スポーツとしての相撲の近代化問題
リー・トンプソン (早稲田大学)
3. 水泳の競技スポーツから処方・予防スポーツへの分化・拡大
野村武男 (筑波大学)

<コメンテーター>

伊藤公雄 (京都大学)

<司会>

黄順姫 (筑波大学)、山下高行 (立命館大学)

<第1 報告>

Prospects and Social transformations of Taekwondo in Korea

Park, Jinkyung (Kwandong University)

Taekwondo is representative traditional sport, as it is military art on the foundation of inherent Korean thoughts and cultures, and is acknowledged all over the world by the values and excellence as sports and martial art. After name called 'Taekwondo' having been made for the first time in 1955, Taekwondo got a basis to develop by worldwide sports through 'Korean Taekwondo Association' (1959) and 'World Taekwondo Federation (1973) establishment.

Afterwards, Taekwondo was adapted to official Olympic sports of the 2000 Sydney Olympics in the tenth IOC general meetings after having just done firmly a base as international sports through showing an exhibition game of Seoul Olympics and Barcelona Olympics in sequence. And also Korean language was appeared in 4th language used in the Olympic events that joined to English, French, and Japanese.

Currently, Taekwondo populations are estimated to 70 millions (trainee included) from 188 countries, black-belt holders are over 6.5 millions, and masters dispatched all over the world reach to 5,000 people. Compared to traditional sports having

been developed to the United States and British, Taekwondo have been shown unprecedented expansion in short periods in the modern sport history.

It was able to let short term develop by the martial arts of the world from the martial arts of Korea, because sportization of taekwondo, globalization strategy through international advance of masters, and concentration of capacity of the organizations collected synergy effect,

Be devoted to quantitative expansion than qualitative development in the processes that Taekwondo aims at globalization, and grow by sports, various problems are appearing to domestic and foreign problems. In outside, Interest decrease and impartiality propriety of the match is the cause of Olympic withdrawal crisis, In a domestic it is experiencing a trouble because of the continuous decrease of training population, flooded and dissonant organizations

This paper is to review the social transformation and its implication of taekwondo that is characterized to athleticism, sportization, and globalization, with the brief overview of historical legitimacy of taekwondo. In addition, this paper suggests the alternatives and prospects to overcome various crisis situations that currently Korean taekwondo is facing.

<第2 報告>

日本における伝統スポーツとしての相撲の近代化問題

早稲田大学 リー・トンプソン

相撲は伝統スポーツとして認識されているのは、じつは近代化の結果である。近代化過程のなかで「伝統スポーツ」として仕立てられたからである。明治以降、相撲はスポーツ化すると同時に、「伝統」を強調するように変化してきた。国技館が建設され、優勝制度が導入され、取り組みの結果としての「引分」と「預り」が廃止され、不戦勝制度が導入され、全国組織の相撲協会が設立され、仕切り線が敷かれ、仕切り制限時間が設けられ、三賞（殊勲賞、敢闘賞、技能賞）が設置され、女性観客が許されるなどと同時に、横綱制度が成立し、土俵の屋根が神明造に変えられ、行司の式服も変えられた。しかし相撲の変化はもっと前からあった。17世紀に土俵ができ、18世紀の後半から土俵祭り、腰に横綱をつけた一人による土俵入り、弓取り式などは、興行のために取り入れられた。そして大相撲の原型とされている各地の寺社で行われる「神事」相撲は、じつは興行相撲の少なからぬ影響を受けているであろう。

大相撲はつねに時代によって変化してきた。その変化の推進力は、18世紀も21世紀も同じである。つまり、交通とコミュニケーションと経済の発達である。これらの過程においてまずいくつかの地域が「国」に統合され、大きな都市が登場し、大相撲はその都市で生まれ、明治以降およそ今のような形になった。今の相撲の形は昔の「伝統スポーツ」とみなし、「グローバリゼーションの波」に曝されているとみることは、これまで相撲がたどってきたこの重要な過程を見過ごしてしまう。グローバリゼーションもまた交通とコミュニケーションと経済の発達によって地域が統合されることの一つの究極の有様である。では大相撲はこれからどう変わって行くのか。それは私たちがどのような相撲を見たいか、ということによる。お客さんがお金を払って見に行きたいような相撲、あるいは放映権料を払ってもいいとテレビ局が判断するような相撲、そういう相撲しか続かないであろう。となると、伝統を思わせるような儀式と、競争の原理が適当にミックスした、明治以降のこれまでのような相撲はこれからも続くと考えるのが妥当であろう。

<第3 報告>

日本における水泳の処方・予防スポーツへの分化・拡大

筑波大学 野村 武男

日本における水泳の発展過程は採取生活時代における素潜り等から、戦国時代における戦略的な水泳が日本泳法として各地で広まった。このような歴史的背景から、近代水泳競技においても第二次世界大戦以前は鶴田、葉室選手等によるオリンピックの活躍は目覚ましいものであった。第二次世界大戦後には、「フジヤマのとびうお」の異名を持つ古橋選手の活躍は、世界中が注目した。しかし、東京オリンピック（1964年）では、過去の活躍からは遠く及ばず、日本水泳は惨敗した。その後、水泳競技の見直しが叫ばれ、全国各地にスイミングクラブが設立された。現在、約 2500 の私立のクラブが存在する。当初、競泳選手養成を目的としたが、徐々に水泳による健康づくりやリハビリテーション・予防医学的な運動療法としての「アクアフィットネス」が定着されてきている。スポーツ医学的な目的としての水泳は、今や精神的な「生きる力」を創出しはじめてきている。特に、高齢化社会が進んだ日本では、介護施設における健康づくりとして、アクアフィットネスが取り入れられてはじめている。

我々はアクアフィットネスとしての NPO（アクアライフ研究所）を立ち上げ、市町村における中高齢者の健康づくり、さらにはスポーツ選手のケア等を実践している。今回の講演では、我々の活動の一部を紹介し、アクアフィットネスがもたらす健康的な意義、さらには社会的な変容の実態について検討する。

◆学生会員ランチミーティング 13:15～13:55 <センタービル2階学生食堂プレジール>

◆一般発表Ⅲ 14:00～16:00

<会場 A・0801 教室>

1. コミュニティ (Community) 座長：山本教人 (九州大学)

江南健志 (京都大学大学院)

スポーツキャンプによる地域活性化に関する一考察 —三重県熊野市を事例として—

江口 潤 (産業能率大学)

大学キャンパスを拠点にした総合型地域スポーツクラブ

長津詩織 (北海道大学大学院)

体育・スポーツ活動と都市のローカル・コミュニティの持続性 —「ファイターズ通り商店街」を事例として—

<会場 B・0802 教室>

2. ファン／観客 (Fan/Spectator) 座長：黒田 勇 (関西大学)

王 止敬 Wang, Chih-Ching (台湾師範大学)

A study on the variation of spectator's composition of The Chinese Professional Baseball League

村上智恵 (東京学芸大学大学院)

観客の視線とプレーヤーのパフォーマンス —舞台と競技場を比較して—

小林正幸 (法政大学)

聖なるものの形骸化 —プロレスを事例にして—

高橋豪仁 (奈良教育大学)

スタジアム空間の管理に関する研究 —プロ野球の特別応援許可規定について—

<会場 C・0803 教室>

3. スポーツ・フォー・オール (Sports for All) 座長：内海和雄 (一橋大学大学院)

朴 永旻 パク・ヨンギョン (神戸大学大学院)

韓国における生涯スポーツの活動に関する研究 —ソウル近辺のハイキング活動に参加する中高齢者を中心に—

神野賢治 (福岡大学)

体育・スポーツ系学生の「ニュースポーツ志向性」とその要因検討 —カリキュラムを通じた“変化”に着目して—

松田恵示（東京学芸大学）

グラウンド・ゴルフとパークゴルフ —障がい者のアミューズメントの視点から—

<会場 D・0804 教室>

4. スポーツの普及 (Sport Promotion) 座長：高峰 修（明治大学）

秋吉遼子（神戸大学大学院）

公共スポーツ施設の利用者特性による満足度の比較 —指定管理者施設のケーススタディ—

中澤篤史（東京大学大学院）

青少年の学校／地域スポーツへの参加と家庭背景 —質問紙調査の分析を通して—

宮坂麻耶（東洋英和女学院大学）

大学教職員の学内スポーツ施設活用状況と活用促進課題

<会場 E・0805 教室>

5. ルールと道徳 (Rules & Morality) 座長：杉本厚夫（京都教育大学）

張 文威 Chang, Wen-Uei（台湾師範大学）

The ambiguity within motorcycle sports in Taiwan

松宮智生（国土舘大学大学院）

総合格闘技に関する一考察 —反則規定の類型を中心として—

笹生心太（一橋大学大学院）

ボウリングの「スポーツ」化に関する考察

熊安貴美江（大阪府立大学）

(財)日本体育協会加盟団体における倫理問題に対する取組み状況

<会場 F・0806 教室>

6. 野球 (Baseball) 座長：清水 諭（筑波大学）

山崎尚志（神戸大学大学院）

野球通説の検証 —出塁の仕方について—

蔡 孟諺 Tsai, Meng-Yen (台湾師範大学)

Current Status of Corporate Social Responsibility on Taiwan Professional Baseball Teams

林 伯修 Lin, Po-Hsiu (台湾師範大学)

コーチの目から見た台湾原住民と野球

◆研究委員会企画 16:10~17:50 <4号館3階431教室>

シンポジウム「方法論的ナショナリズムの諸問題

ーメディア言説とナショナリズムの共犯性を批判的に検討するー」

司会と問題提起 小笠原博毅 (神戸大学)

発表

1. スポーツにおける言説ーサッカーを中心にー

森田浩之 (フリージャーナリスト)

2. 「身体論的ナショナリズム」考

山本敦久 (上智大学)

3. 大相撲におけるナショナリズムの出現 (モンゴル出身力士をめぐる)

富川力道 (モンゴル・ブフ・クラブ会長)

司会と問題提起：小笠原博毅 (神戸大学)

あからさまな愛国主義や排外的なショーヴィニズムとは一見かけ離れたところで、スポーツを語る言説はナショナリズムを速やかに構築している。「カタカナばかりの外国の事ばかりでなじみが薄い」、「まずは日本のこと優先的に考えよう」、「やっぱり日本人なんだから日本のことがよくわかる」などの、一見何気ない言葉のやり取りにコミュニケーションの前提は、<日本>という共同性である。言説の対象と発話者、また言葉と発話者の位置の間に同質性を構築することがそのまま対象の「理解」と「承認」を保証するという考え方。これがネイションを舞台に繰り広げられるとき、私たちはそれを「方法論的ナショナリズム」と呼ぶことができる。このセッションでは、「とりあえず日本人なんだから」というしごくまっとうに聞こえる前提条件作りが、どのように他者を閉ざすメカニズムを作り上げているのか、さらにはより顕在的で排他的なナショナリズムの条件作りをしているのかを綿密に検証する。

スポーツにおける言説ーサッカーを中心に：森田浩之 (フリージャーナリスト)

スポーツニュースは何食わぬ顔で、私たちに<日本人>であることを刷り込もうとする。「私たちは日本人である」という一体感と、ステレオタイプな「日本人らしさ」を言葉の裏側で伝えようとする。スポーツニュースにおける<日本人>のつくられ方を、日本人メジャーリーガーやサッカー日本代表の報道に探る。

「身体論的ナショナリズム」考：山本敦久（上智大学）

近年の身体論ブームを批判的に検証していく。江戸の物腰、ナンバ歩き、丹田など、失われた「身体」を取り戻そうとする言説とメソッド、またそれを押し上げていく保守的な機運に危機感を感じる。失われた「身体」を復権させることで呼び出され、構築される「日本人」という図式について批判的議論を展開したい。

大相撲におけるナショナリズムの出現（モンゴル出身力士をめぐって）：富川力道

大相撲の国際化によって外国人横綱などは日本が想定する横綱像とはしばしばかけ離れてきている。それは、「相撲は国技である」「相撲は神事である」という伝統意識と心情と、大相撲を経済的成功の手段として利用する外国人力士との価値観の衝突とずれが起きている。そこから生まれてくる虚構なナショナリズム的な言説を探る。